

社会福祉学部

<平成30年 推薦・(一般・専門総合・震災特別選抜)>

小論文 (配点 100 点)

【出題意図】

悔いのない人生の送り方について述べた資料を題材に、人が、自分が生きた証を子どもや家を継ぐ者に伝えたいと思うことは自然なことであると述べる筆者の主張に対して、自分の意見・立場を表明し、論証過程を通じて論理展開力と文章表記力をみる。

【解答例】

1

「型」も「言葉」もぶれない精神を伝える手段であるが、「型」が、習慣、身体の訓練、製法などの身体の型を表す一方、「言葉」は、「風姿花伝」や「論語」のような読み継がれる書物や、自分が生きた証を子どもなどに伝える家訓のような短い文言を表す。(117 字)

2

筆者が本文で述べているように、心と精神は混同されやすいが、心は一人ひとりが持っているもので天気のように移り変わりやすいのに対して、精神はぶれないために人々の間で共有していきやすいものであるといえる。また筆者が述べるように、生物が DNA の乗り物のようなものであると仮定すれば、こうした精神の DNA を次世代に伝えることは、人間の使命といわざるをえない。

これについて、私が考える理由を次の 2 点にまとめてみた。

一点目は、世阿弥が生きた時代の能のように、様々な流派があり、数あるライバルがいるなか、家がすたれずに繁栄していくためにはどうすればよいかを考えなければならないような人間の営みがあるからである。現代でいえば、スポーツ、芸術、学問における精神の DNA の継承がこれに当たるであろう。「家」を「国」に置き換えて考えると、例えば、難治性疾患の治療のため、ips 細胞を使った人間を対象とする臨床検査を、近いうちにわが国が開始する例が思いつく。もしこの治験が証明され、難治性疾患の治療に ips 細胞の実用化が国によって許可されれば、ips 細胞を難治性疾患の治療に応用する方法は、精神の DNA として、論文や書籍の形で全世界の医療従事者、医学研究者、難治性疾患患者に共有されることになるであろう。

二点目は、筆者も述べているように、自分が生きた証を子どもや家を継ぐ者に伝えていきたいと思うのは自然なことであると考えためである。自分が生きた証の例としては、墓のような単なる生きた証ではなく、本文中にもあるように、「児孫のために美田を買わず」のフレーズのような、子供や家を継ぐ者にとって役立つ短い文言であるべきであると考え。

以上、精神の DNA を伝えていくことが人間のミッションである理由について考察した。これについて、上記二点目の理由に関係するが、果たして自分はどんな言葉を残したいかについて、これから考えていきたい。(800 字)